

事例報告

地場産業の創造と雇用創出

熊本県荒尾市地域再生マネージャー 齊藤 俊幸



1. 地域の消費を支える産業の成立と維持

荒尾市の地域再生事業のテーマは「地場産業と住民の共生対流による起業創造と雇用機会の増大」である。ここ熊本県荒尾市は隣接する福岡県大牟田市とともに日本有数の産炭地域として発展し、主に労働力を提供する住宅地としての役割を果たしてきた。しかし、平成9年の閉山に伴い、関連産業は一気に衰退し、企業誘致や住宅政策を進めるものの、荒尾市の経済活力は停滞する一方だった。平成15年度の有効求人倍率は0.33と国平均や県平均に比べても低く、高齢化も進んでいる。地域における雇用創出は、緊急の課題となっていた。こうした課題を受け、荒尾市は地域再生マネージャー事業（総務省）とパッケージ事業（厚生労働省）を活用し、雇用創出の受け皿づくりを進めている。

地域再生マネージャー事業では、1 km先にある大型店の影響を受け、生鮮三品の店が絶滅するなど苦戦を強いられていた中央商店街に焦点を合わせ、商店街の人たちと協議しながら空き店舗を活用したまちなか研究室「青研」を設立した。また、主婦等が日替わりでシェフを勤めるコミュニティレストラン「梨の花」、オープンカフェなどを開設し、まもなく商店街にワイナリーがオープンする。商店街にたった3軒程度だが市民協働型の店がオープンし活動しはじめるとまちの趣が変わり、流れが変わってくることを実感する。

私はシャディのサラダ館の生き残り方が好きだ。大阪の衣料店のボランティアチェーンが衣料店の店頭5坪程度を活用してギフト店を始めた。このギフト店のフランチャイジーが当たり、繊維不況といわれる中、彼らは生き残れた。こんな「横ずれ」による新たな集積づくり、価値づくりに興味がある。古くは神田の古本屋街、札幌のラーメン横丁、私はこんな集積に興味を覚える。奈良県大宇陀郡は昔薬の産地だった。葛湯や葛根湯の産地で多くの薬卸がいた。こんな集積が、高度経済成長の時代の中で突然、日本を支える大企業を生ん

だ。ロート、ツムラ、藤沢薬品工業などである。かつてIT企業が、パチンコで言う“チューリップ全開状態”で成り上がったように、きっとこれらの集積も同時期に栄え、同時期に価値を見出され大きくなっていったに違いない。

今、荒尾市では次の時代を担える集積づくりを目指し、まずは鳥の巣づくりを進めている。地域で成り上がる必要はもはやないが、もしこの集積のひとつがうまく行きだすと次から次へと同じような連鎖を生み出すのではないか。次の時代を担う、地域を担う地場産業って何だろうか、果たしてどんな分野が“チューリップ全開”となるかひたすら考える。

荒尾市のまちなか研究室「青研」では「青空市」を行っている。地場で取れた農産物の直売所「青空市」は駐車場がなく、こんなところに大丈夫かと随分言われたが、ふたを開けてみるとお客さんは近所から歩いて来られる高齢者たち150人だった。オープンの頃、おばあさんに「今まで1 km先にある大型店まで1週間に1回タクシーに乗って買い物に行っていた。青物をしばらく食べていない。ここに作ってくれてありがとう」と拝まれたことが忘れられない。私はこれから「青空市」は日本の地域のいたるところで必要となり、高齢化社会の中で域内の消費を支える産業の育成は急務となると考えている。こうした小さいながら地域の消費を支える産業の成立と維持は重要な課題となるのではないだろうか。

まちなか研究室「青研」では厚生労働省のパッケージ事業を活用し食づくり、酒づくりの研究会を開催している。起業意志がありやる気のある住民が集まり、味噌や醤油、ヨーグルトやチーズ、ワインや酢などの域内の消費を支える産業のあり方を考えながら受講生のグループ化を進めている。これらグループの連携組織による起業を支援し、地域の雇用創出の受け皿を側面支援するのが地域再生マネージャーの役目であり、3年後に150人の雇用を目指している。あるグループは「瓢箪か

●気合の入った家庭料理

コミュニティレストラン「梨の花」は地元の主婦が中心となり日替わりでシェフを務めているレストランだ。地元で取れた食材を活用した「気合の入った家庭料理」が合言葉だ。



●徒歩圏内の消費を支える

歩いて来られる高齢者たちに支えられている「青空市」。こうしたニーズは荒尾市にたくさんあるのではないかと。これから2店舗目、3店舗目の開業を目指す。商業者、農業者、地元住民の交流がはじまり、農産加工などの協働も始まっている。



●商店街がワインを仕込み自立する

まちなか研究室「青研」では商店街の人たちが企業組合を設立し1ヶ月に一回、ボランティアでワインを仕込み、収益をまちづくりに充当し活動している。学生と協働するまちなか研究室はワインの収益で自立している。ここを舞台に若者や団塊の世代の起業の受け皿となる連携組織の起業を促進し、地域コミュニティの再生を目指している。



●農家が焼酎ブランドをつくる

荒尾産芋（紅あずま）を活用し、芋焼酎のブランド化に挑戦している。利益は農家に返してゆく。農家がブランドの付加価値を享受できる仕組みづくりを模索している。



ら駒」のように成功し、あるグループは「怪我の功名」で生き残り、そしてあるグループは「思惑倒れ」であってもいいだろう。こうして地域の活力を取り戻し、地域の能力構築を図り、やがては地域独自の強みのあるかたちを形成し、地場産業の創造と雇用創出へと結びつけて欲しいと切に願う。

2. 荒尾市の地域再生事業

荒尾市へは2004年12月から地域再生マネージャーとして単身赴任している。商店街のお茶屋のあった建物に住み、毎日自転車で走り回っている。最近自転車に乗っていると必ず誰かがクラクションを鳴らしてくれるようになった。狭いまち、よそ者だからこそ、話を聞いてくれたのだと思っている。閉塞感のある地域にはよそ者が来て活動するのもたまにはいいのではないかと。これから起業

支援、特産品開発、住民連携に関わる「継続して付加価値を更新する仕組みづくり」を目指してできることをできるだけ具体化して行きたい。

荒尾市の現場で住民と議論し実現してきたいくつかの仕組みを上記で紹介する。

著者紹介

齊藤俊幸（さいとう としゆき）

荒尾市地域再生マネージャー（総務省）、関東学院大学非常勤講師、イング総合計画㈱代表取締役。総務省「大学と連携した地域づくり」研究会委員。みはらしファーム（伊那市：日本農業大賞受賞団体）、追浜こみゅに亭&ワイナリー（関東学院大学：横須賀市）、インドネシア中小企業クラスター機能強化計画（JICA）などに携わる。主な著書に「実践コミュニティビジネス」等。